

## 貧困と教育難民

労働者委員 奥 恵利美

「子ども食堂」という言葉を数年前から耳にするようになりました。子どもの貧困対策として、経済的な面から食事をとれない子どもたちに地域の大人やボランティアの皆さんにより無料または数百円で提供している食堂です。最近では、子どもたちに朝食の大切さを教えようとする「子ども食堂」。また、こどもが一人ぼっちで食事する孤食を防いでいろいろな人たちに触れながら、だんらんができる事を目的としている「子ども食堂」もあるようです。子どもはそこで出会った人に遊んでもらったり、親は子育てのアドバイスをもらったりと憩いの場として役立っていると聞いたことがあります。孤立しないためにも大事な役割を果たしているのではないかと思います。

子どもは親を選べませんので不幸にも親の貧困が子どもの貧困を招いています。離婚によるシングルマザーが貧困を生みだしているケースが少なくはないようです。私の勤務先の連合で相談を受けたシングルマザーは、子どもが小学校に入学した頃、パートの仕事を解雇されたために生活が苦しく、食事を1日に2回(内1回は給食)しか食べさせてあげられない状況でした。生活保護の申請をするようアドバイスをし、今では多くはない収入ですが、3度の食事はできるようになったようです。しかしながら、これから子どもが大きくなり高校、大学と就学するには大金がかかります。親が教育資金を出せない場合は、奨学金制度に頼らなければ進学できないこととなります。それはのちのち子どもたちのローンとなり、重くのしかかってきます。また親元から離れて就学する場合、親が何らかの事情で生活苦となり、経済的に親からの支援を受けられなくなった学生は、自らアルバイトで生活費を稼がなければならなくなります。バイトで労働を強いられ、卒業できずに貧困となってしまうケースもあるようです。卒業できたとしてもいきなり奨学金返済の為、借金を背負っての社会人スタートとなり、社会人になっても貧困から抜け出せないということにもなりかねません。

教育を受けなければ低賃金の仕事にしかつせず、貧困の連鎖となり悪循環となってしまう。

連合でも貸与型の奨学金を給付型の奨学金へ制度を変えようと活動を繰り広げています。全ての学生に対しての給付型奨学金制度実現が貧困・格差の解消につながるの思いからこの運動を展開しています。

全ての子どもたちが平等に教育を受けられるよう、貧困・格差の解消となる社会保障制度が確立できることを切に願っています。